大阪教育大学広報誌 TENYU
2016

天遊

特別号

Contents

大阪教育大学長
シンクロナイズドスイミング
日本代表コーチ

対談 栗林 澄夫×井村 雅代

特別支援学生・卒業生座談会／附属学校園ウォッチ拡大版
TOPICS／ICT教育支援ルーム特集／公式キャラクター年間活動記録

国立大学法人
大阪教育大学

日本の教育界へ 魂の提言

教師たちよ、たくましくあれ！

大阪教育大学長
栗林 澄夫（くりばやし すみお）

対談

シンクロナイズドスイミング 日本代表コーチ
井村 雅代（いむら まさよ）

富山大学文理学部卒、大阪大学大学院文学研究科修士課程修了、文学博士。研究分野はドイツ近現代文学。平成16年4月から国立大学法人大阪教育大学理事・副学長、平成26年4月から学長に就任。昭和23年生まれ、67歳。

天理大学卒業。選手時代は日本選手権で二度優勝し、ミュンヘン五輪と同時開催された公開競技に出場。現役引退後は、大阪市の中学校教諭（保健体育科）として教鞭をとりながらシンクロ指導に携わる。昭和53年から日本代表コーチに就任し、昭和60年には「井村シンクロクラブ」を創設。以降、日本、中国、イギリスなど世界各国で代表チームの指導にあたり、幾多のメダリストを生み出した。平成26年から日本代表コーチに復帰し、翌27年、リオデジャネイロ五輪ヘッドコーチ起用が承認される。大阪の教育界との関わりも深く、大阪府教育委員、松原市教育委員長を歴任した。昭和25年生まれ、66歳。

世界を舞台に活躍する指導者は、いまの日本の教育界をどう見ているのか？
「日本シンクロの母」として幾多のメダリストを生み出した、シンクロナイズドスイミング日本代表コーチの井村雅代氏が
栗林澄夫学長と緊急対談！ 現代の若者から見える教育の課題について、本音をぶつけ合いました。

日本の若者の変質

栗林　平成21年に、本学開学60周年記念事業でご講演いただきましたが、今回再びご縁によりお会いできたことに感謝します。この間、世界各国の代表チームを指導してさらなる実績を積み重ね、10年ぶりに日本代表コーチに復帰されたわけですが、その時の心境はいかがでしたか？

井村　強い日本を復活させようというその一心でした。わたしが生まれた国、そしてわたしを育ててくれた国ですから、強くなければ面白くない。もう一度日の丸を背負って、選手を連れて国際試合で戦ってみようと決めたのです。シンクロって、日本人の精神に向いている競技だと思うのです。欧米やアフリカの選手に比べて体型には恵まれないし、運動能力も見劣りする、そんな日本人がなぜメダルを獲れるかというと、お互いが心と身体をぴったり合わせるまで粘り強く努力ができるからです。

栗林　昔から日本人自身が誇りとしているものですね。

井村　逆に言うと、それがなくなったらおしまい。いま若い選手を指導してつくづく感じています。わたしが彼女たちに向けて口を酸っぱくして言っている言葉、何だと思いますか？　それは「無理しなさい」ということ。いまの若い子たちは無理をしない。もっと追い込めば可能性を広げられるのに、自分で自分を安く見積もっているのです。寝る間も惜しみ、自分の出せる力をすべて出し切って、さらに無理を重ねて、それでも結果が出ないことってありますよね？　でもそれによって原点に立ち返ることができるのです。間違いに気づき、軌道修正できる。力を出し切らずに失敗すると、次はもっと頑張ろうという思考になって、そもそもその軌道が間違っていても気づかないのです。選手の中にはやるべきことはやったと断言する子もいますが、それではそこまでの選手で終わってしまう。可能性の広がりを自ら閉ざしてしまっています。だから、わたしは無理をしなさいと檄を飛ばしているのです。

栗林　日本の若者全体に感じることですが、厳しい鍛錬を積んでいるアスリートであっても、先生の目から見るとそういった甘さを感じるのですね。

井村　心の甘さは態度や表情にも表れてきますから。就任当初は歩き方まで注意していましたよ。更衣室から練習プールに移動するときに、うつむいて、背筋が曲がって、そんな歩き方でどうやって強くなれますか？　挨拶一つにしてもそう。こちらの顔を見ずに、そっぽを向いて挨拶するのです。挨拶って、ただ「おはよう」と言葉を交わすだけじゃなく、その表情で〝元気かな、疲れが残っているかな、何か悩んでいるのかな〟と感じ取れますよね。普段の生活態度から心構えや戦う姿勢を養わなければいけない。だから、その一つひとつを正すよう注意しましたが、彼女たちはその意味にまったく気づいていなかった。でもそれは彼女たちが悪いのではなく、そういった基礎的なことをしっかりと教えてこなかった周りの大人が悪いのです。

若者に反映される教育の問題

栗林　社会全体の問題ですね。

井村　そう、子どもは大人の鏡ですから。本当は10歳ぐらいまでに経験しておかないといけないことです。世の中にある規律を、親や教師のような身近にいる大人が叩き込んでおく必要があるのに、それができていない。いまは大人が守りすぎる。優しすぎるのです。

栗林　かつての日本人は、社会全体で守る規律と、それぞれの心の中にある規律、その両方を重んじ、己を戒めることで国全体の秩序が保たれ、ひいては国際社会からも一目置かれてきました。いま、その秩序が崩れつつあることは、われわれ日本人皆が感じていることで、ゆとり教育の影響も、そこには含まれていると思います。わたしは、この教育の意図していたところ、基礎的学力をつけつつ、考える力を養うという考え方

はいまでも間違っていないと思います。しかし、実際は甘えを助長するだけに終わり、真にめざすものが実現できなかった。

教師に反映される教員養成の問題

井村　教師一人ひとりの資質による部分も大きいと思います。教師を志す学生は、一様にまじめで優等生ですよね。でも教室にはさまざまな生活背景のある子どもたちがいる。当然、勉強嫌いな子だっています。わたしは、学校は勉強する場であるとともに、それを通して嫌なことから目を背けず、向き合う場でもあると思っています。シンクロが、高いステージに上がるために難しい技を会得しないといけないように、子どもたちも苦手な教科を克服し、乗り越えないと成長できません。その乗り越える力をともに育むために教師がいるわけですが、勉強を放棄する子どもたちを説得するだけの言葉を持っていない教師が多すぎます。どうして嫌いなのか、どうしてできないのか、自分は勉強ができたがゆえに、深く理解できていないのです。人を正しい道へと導くことに一律の正しい答えなど存在しません。さまざまな答えを知っておかなければ、子どもたちの反応が自分の答えに当てはまらなかったときに、病んだり、押さえつけたり、悪い方向に進んでしまいます。

栗林　これまで本学を含めた教員養成系大学では教科による専門的知識の習得に重点を置いてきました。しかし、教室の中にはいじめもある、暴力もある。教科書の知識だけでは通用しないと痛感しました。こうした問題に対応するために、本学では実践力の育成に力を注いでいます。改革の一例として、学校での体験実習を一年次からカリキュラムに取り入れ、早くから学校と関わる機会を増やしたり、企業インターンシップに代表される就業体験を奨励したりして、広く世の中を知り、現場で活きる力を養成しています。

井村　いろんな社会の価値観を知ってほしいですね。懐の深さを身につけるには、学生のうちからさまざまな価値観にふれる機会をつくり、心揺さぶる場面に出会うことです。そのためにも、できるだけ学校現場に出る機会をつくり、いろんな経験を与え、生きる力、人間力を身につけさせることが大事ですね。

多様な価値観と言葉を持つ教師となるために

栗林　昨今、新任教師が荒れた学校に配属されることを問題視する声が挙がっていますが、わたしは修行の一環として必要なことだと思っています。もちろん、大学は免許状を与えればそこでお役御免ではありません。教育委員会と連携し、一人前の教師に育て上げる責任があります。特に現職教員研修は、これまでも各地域の教育委員会と連携して進めてきましたし、これからもさらに強化した取り組みを展開していきます。

井村　それも形式的な研修ではなく、本音の研修をお願いしたいですね。わたしが教師だったころは、研修制度はなかったのですが、代わりに先輩の先生がいろんなことを教えてくれました。いまでも忘れられない思い出があって、駆け出しの体育教師だったころ、一人の生徒から「先生は自分の好みのトレーニングウェアを着ているのに、なぜわたしたちは皆おそろいの決まったものを着ないとあかんの」と質されたのです。わたしは、返す言葉が見つかりませんでした。職員室に帰って先輩の先生に相談したところ、「あなたは社会人だから、自由もあればそれに対する責任も負う、指導する側の人間でしょう。対して生徒は指導される立場であり、社会から守られている存在なの。そうであれば、守られているものとしてのルールに従う必要があるし、守ることで得ることもたくさんあるのよ」と教えてもらい、すとんと腑に落ちました。次の授業で自分なりに解釈したその答えを生徒たちに説明すると、皆大きく納得してくれました。日々子どもと向き合っている現場の先生からすればささいな助言も、新任の教師には金言となります。わたしにとって教師時代の8年間はいまの原点であり、命を張って人と向き合うことの大切さを教えてもらいました。あの経験があるから、国際舞台でのしびれる場面にも冷静でいられるのです。

教師を志す学生へ

栗林　人の前に立つ者の心得を、本学の学生に向けてご教示くださいませんか。

井村　教師は第一に、子どもの人生を預かっていることを忘れてはいけません。関わる子どもたちの一生に影響を及ぼすことにやりがいを見出すとともに、その重みを感じてほしい。子どもたちの成績や生活態度が悪ければ、それは全部自分が悪いと思うことです。シンクロで選手たちの成績が振るわなかった時、彼女たちの心が動かなかったこと、試合で力を出し切れなかったこと、力不足だったこと、それはすべて私の責任です。教師も、教室を離れて、陰で深く反省できるかどうか、そこが教育者として、そして人として成長できるかの分かれ目です。

栗林　責任転嫁せず、真正面から子どもと、そして己と向き合うということですね。

井村　そして恥をかくことを恐れないでほしい。大教大の学生は学力が高く、まじめで優秀ですね。半面、そういった子たちはその分プライドも高くなり、恥をかくことを避けてしまう。恥をかかない人間なんていないのに、変なプライドが邪魔してしまうのです。でも恥というのはなかなかいいもので、こんな目に遭いたくない、こんな思いはしたくないと思ったときに人は成長するものです。外へ出て、どんどん恥をかいて、そこからいろんなものを得てほしい。

栗林　わたしも恥の多い人生を送ってきましたが、人間生きていくためには恥を気にかけている余裕なんてありません。

井村　生きるということは苦難の連続ですからね。そして苦難に立ち向かって超えたときの達成感の連続でもあります。若い人にはもっと困難に挑戦する気概を持ってほしい。わたしも一昨年10年ぶりに日本代表コーチとして水泳連盟に復帰しましたが、大手を振って歓迎されたわけではありませんでした。だからこそ、〝よっしゃ、やってやろう〟と発奮し、昨年の世界水泳選手権大会（ロシア・カザン）での4大会ぶりとなるメダル獲得につながりました。それが契機となって大勢が変わり、わたしをトップとして五輪へ挑もうと足並みがそろったのです。学生の皆さんも、自分が必要とされる場所を探すのではなく、どこに行っても必要とされる存在になってください。居場所はつくるものです。なぜそうまでしてわたしがシンクロの現場で闘い続けているかというと、若者に人生で得たものを伝え、未来を託したいからです。その気持ちは若いころのまま、やってやろうという熱意がある限り、心に定年はないのです。

教師たちよ、たくましくあれ！

栗林　先生のおっしゃることを、学生たちが教師となって実行できれば、教師全体が、ひいては日本の教育界が生まれ変わるでしょう。

井村　お互いを高めあえば、全体の底上げにつながりますね。いま、選手には日々の目標として、「普通のレベルを上げる」ことを課しています。一例を挙げると、練習で指示を送ったり、注意したりする際は、選手には立ち泳ぎの姿勢を保たせています。プールの水深は3mあるので、浮力がかかり、立ち泳ぎしなくとも沈むことはありません。何時間も練習を重ね、疲労困憊の状態なので、以前は鼻の下まで水に浸かりながら私の話を聞いている姿も見られました。でも、聞く姿勢をつくることも大切なことですから、肩のラインより上は水に浸けないよう義務づけました。それが普通のこととして定着したことで、さらに高い次元を求めてサイクルが廻っていくのです。教育も同じことで、周りに気を配るとか、率先して動くとか、子どもたち一人ひとりの意識を高めて、学級全体のレベルを上げてください。教師が変われば子どもたちが変わる、子どもたちが変わればこの国の未来が変わる。その日まで、教師たちよ、たくましくあれ！

栗林　波乱万丈の人生経験に裏打ちされた金言の数々、本当にありがとうございました。リオデジャネイロ五輪でのご活躍をお祈りしております。

障がい学生支援 学生・卒業生 座談会

ダイバーシティ（多様性）を活かす大学へ

――障がい者支援から得た学び――

本学に「障がい学生修学支援ルーム」（以下、ルーム）が開設され、5年目を迎えます。全学を挙げた支援体制が根付くまでの、黎明期、確立期、発展期を支えた卒業生および現役学生がこれまでのルームでの活動を振り返り、支援を通じて得た学びが現在の自分にどのようにつながっているかを語り合いました。

池谷　皆さんが障がい者支援をはじめようと思ったきっかけは？

吉川　ぼくは、特別支援学校の教師をしていた母の影響です。母に連れられて、ボランティアや学校行事によく参加していました。幼いころから障がいのある人のそばにいることが日常で、母と教え子たちとのやり取りも間近で見ていたので、将来も母と同じ道に進むのだろうと考えていました。

進藤　わたしは弟が自閉症スペクトラム障がいだったので、弟と一緒に、療育施設で勉強したり、そこで弟とともに学ぶいろんな障がいのある子たちと話したりして、漠然と、自分は将来障がいのある人たちと関わっていくような気がしていました。教師になろうと思ったのは、自閉症スペクトラム障がい児の成長を描いた漫画『光とともに…』（戸部けいこ著　秋田書店）を読んで、主人公と担任の先生とのふれあいに共感したことがきっかけです。学校の先生という立場で支え、育てる、そんな関わり方もあるんだなと感じました。

池谷　ふたりとも幼いころから関わりがあったんだね。荒木さんは？

荒木　ぼくはふたりとは対照的に、大学に入るまで障がいのある人と関わったことがなく、関わりたかったから支援学生になったわけでもありません。きっかけは、入学手続きの書類と一緒に入っていた「あなたも支援に参加してみませんか？」というルームの募集チランでした。講義内容をパソコンに打ち込み、音声を文字化して情報を伝える「ＰＣテイク」の単語に惹かれたのです。タイピングには自信があったのでテクニックを活かせるし、しかも謝金ももらえる。一石二鳥じゃないかと思って、ルームのドアを叩きました。

池谷　ルームに入るまでは、障がいのある人のことはどう思っていた？

荒木　当時の感覚そのままでいえば、どうコミュニケーションを取ればいいんだろう、と。でもルームで支援利用学生と接してみると、目が見えなければ声で、耳が聞こえなければ文字や身振りで伝えることができるし、話してみれば、他愛もないことで笑ったり、怒ったり。なんだ、自分と変わらない普通の学生じゃないかと思いました。

池谷　吉川さんが入学した時は、まだルームもなく、全学を挙げた取り組みもこれからというところで、いわば支援の夜明け前にあたるけれど。

吉川　ルームができる前はここもソファだけの空間でしたしね。ぼくは昔から特別支援と縁がありましたが、聴覚障がい者とは面識がなく、手話を覚えることもありませんでした。それが、同じ専攻の中に、聴覚障がいのある学生がいたことをきっかけに、手話での修学支援を始めることになったのです。当時は講義中に情報保障を進める環境が整っておらず、その人の修学支援は手話サークルの学生有志が中心となって行っていました。ぼくもその人から手話を習って親しくなり、2回生から本格的に手話サークルの講習を受け、支援の輪に加わりました。その影響もあって、聴覚障がいの教育研究を専門とする先生のゼミに入りましたが、そこには聴覚障がいのある学生が複数在籍していました。そこで、障がいの有無に関わらず、トークやバリアフリースポーツで交流を深める場をつくろうという気運が高まり、学生チャレンジプロジェクト（※1）企画「しゃべり場」が誕生したのです。

池谷　「しゃべり場」は聴覚以外の障がい学生や、留学生も参加するようになって、現在も広がりを見せながら継続しているね。

吉川　支援の思い出としてもう一つ、心に残る出来事があります。大学を卒業した２０１１年３月に、東日本大震災が起こりました。自分に何かできないかと思い、特別支援教育講座の先生や同期の仲間に相談し、同期の仲間と共に学生代表として「東日本大震災被災障がい者支援プロジェクト（※2）」を立ち上げることになりました。4月の大学ガイダンスで募った多くの熱い思いをもった学生と共に、特別支援教育を学ぶ学生として何ができるかを話し合い、活動を開始しました。どんなことをしたかと言うと、現地で被害を免れた福祉作業所の協力を得て、避難場所周辺の障がい児を預かって、子どもたちにはレクリエーションを、保護者には休息の場を提供する「レスパイトケア」という活動です。また、被災地の福祉作業所で作られた商品を大学に取り寄せて大学祭で販売し、売り上げの全額を福祉作業所に還元する取り組みも行いました。その際、模擬店に来ていただいたお客さんにメッセージをいただき、タペストリーやモザイクアートにして福祉作業所に売上金と共に送りました。

池谷　全学での支援について、萌芽が見えたときだね。進藤さんが入学したのもこの時期だね。

進藤　入学当初は、自閉症スペクトラム障がい以外の障がい種について関わるつもりはありませんでした。ところが、友人に半ば無理やり誘われた手話サークルで、音声を介さずコミュニケーションをとる姿を見て、すごいな、わたしもやってみたいなと感じました。それに、言葉を視覚で表現するところは自閉症スペクトラム障がい児との接し方にも共通するので、支援法の一つとしても知っておきたいと思いました。そこから、聴覚障がいをはじめいろんな障がい者のコミュニティと関わるようになり、ほかの大学の取り組みにも興味がわいたので調べてみると、キャンパス

多様性を認め合い、共に生きることについて考える機会を

［コーディネーター］池谷（いけたに）航介（こうすけ）

1996年度大阪教育大学小学校教員養成課程卒業／2006年度同大特殊教育特別専攻科修了／2012年度同大学院教育学研究科修了
小学校教員を経て2014年から教職教育研究センター特任准教授・障がい学生修学支援ルームコーディネーター。

今の自分にしかできないことに挑戦していきたい

[卒業生] 吉川（よしかわ） 悠貴（ゆうき）

奈良県立西和養護学校教諭
2009年度特別支援学校教員養成課程卒業／2011年度大学院教育学研究科修了
在学中は、ルーム開設前から聴覚障がい学生の修学支援に携わる。

内に支援施設があり、大学が主体となって運営しているところがあると知りました。そこで、大教大にもあったらいいなと思っていたところ、大学が動いてくれて、4回生の時ついにルームが開設されたのです。自分の思い描いていたことが実現して本当にうれしかったです。

池谷　この頃にちょうど荒木さんが入学してきたんだね。

荒木　できたばかりで環境も何も整っていなくて、だからこそ、より理想的な空間に近づけるために、やりたいことをやらせてもらった4年間でした。ぼくが入学したころはPCテイクによる支援が広がりつつある頃で、授業でテイクの練習をさせてもらえないかとも考えましたが、なかなか叶いませんでした。それならばと、教員志望の学生の模擬授業を録画して練習教材にしたのです。テイカーはトレーニングになるし、授業をする学生にとっては問題点を客観的に分析することができます。このように、困りごとを見つけて解決し、新しいものを生み出す試みは、自分自身の成長にもつながりましたし、就活でも大きなアピールポイントになりました。

池谷　初代学生代表でもあった進藤さんは、ルームのあゆみをどう見ていた?

進藤　荒木さんたちがいろんなアイデアを生み出してくれて、それを学生皆で実行し、形にしたことで、学生が主体となって運営し、教職員がそれをバックアップするという、ルームの特色がだんだん確立できていったように感じます。ルーム全体がうまく回っているのが目に見えてわかり、とても楽しかったです。それに、ルームができる前、聴覚障がい学生の支援は特別支援教育を専攻する学生たちが主体で、わたしも含め、障がい者の権利を守らなければという意識が強すぎたように思います。それが、新しい視点を持った学生たちと出会うことによって、自分たちの考えを見直す機会になりました。ルームの職員の方々も、「人として良くなるためにどういった振る舞いをするべきか、お互い学び合いましょう」と言ってくれ、自分の中で考えの転換があった一年でした。

お互いを尊重し認め合う関係づくりを

[在学生] 荒木（あらき） 航平（こうへい）

教養学科 人間科学専攻4回生
1回生から支援学生として活動。
2013年度から2015年度まで、ルーム研修リーダーを務める。

池谷　皆さんに伺いたいのだけれど、大学での支援によって得た学びは、現在の自分にどう活かされているかな?

吉川　正直なところ、6年もの間、特別支援について勉強し、ある程度実践の場数も踏んでいたのに、いざ現場に出てみるとわからないことばかりで、子どもたちの姿を見て日々学びを続けています。それでも、「しゃべり場」や震災ボランティアなど、学生のうちにしかできないことを、同じ志を持つ仲間とともに経験できたのは一生の財産です。教師になって4年目となる今、奈良県の特別支援学校におけるICT教育を推進する取り組みをしていますが、これからも今の自分にしかできないことに挑戦していきたいです。

進藤　わたしも担任している学級をまとめるのに精いっぱいで、つい子どもたちに感情的になってしまうこともあって、まだまだ大学での学びを活かせていません。でも、学生代表としての日々は現場に活かせると思うし、活かしていきたい。支援を利用する学生も、支援に協力する学生も、一人ひとり考え方や価値観が異なり、個性がぶつかり合うこともありました。そんな時はルームのスローガン「ともに気持ちよく学び合う活動にしよう」に照らし合わせ、間に自分が入ってどうやって共に気持ちよく過ごせるかにとても頭を使いました。あの経験を今の学級にも活かしていきたい。

池谷　現在担任している子どもたちに伝えたいことはある?

進藤　一人ひとり違っていいということです。「教科書を出しましょう」といっても、すぐに出せる子もいれば時間のかかる子もいます。なんにでも個人差がありますし、できることはそれぞれ違う。できない子には追いつく気持ちを持たせ、できる子はもっとできるように伸ばしながら、待つ、手伝う、そういった思いやりの心を育んでいきたいです。障がいの有無に関わらず、違いを分かち合い、良さに変えていくことができれば。

池谷　荒木さんは企業就職だけれど、どう活かしていきたい?

荒木　ITの技術でさまざまな領域の問題を解決する、システムインテグレータという仕事に就くので、ルームで学んだことが直接活かされるかは未知数です。それでもルームでの日々は無駄にしたくない。この4年間、ずっと楽しかったわけじゃないし、「ともに気持ちよく」をスローガンに掲げているということは、すなわち、簡単に気持ちよくない関係に変わるということ。そこをどうやって気持ちよい関係に構築していけるか、精一杯探ってきました。お互いを尊重し、認め合う関係づくりを、社会に出ても実践していきたいですね。

池谷　社会に出れば、教師であれ、サラリーマンであれ、出会う相手は選べない。だからこそ、学生のうちから多様性や価値観を認め合い、共に生きることについて考える機会を得ることは重要ですね。どうもありがとうございました。

（※1）…学生の自主的、創造的な活動を大学が支援するプロジェクト型の取り組み。

（※2）…2011年に結成。活動内容は、被災地の障がい者施設への大学祭収益金の寄付、被災した障がい者やその支援状況を知らせる展示開催による啓発活動、被災した障がい児支援のレスパイトケア活動など。

一人ひとり違っていい

[卒業生] 進藤（しんどう） 伴予（ともよ）

大阪市立南港光小学校教諭
2012年度特別支援学校教員養成課程卒業／2014年度大学院教育学研究科修了
支援ルーム開設前から聴覚障がい学生の修学支援に携わる。2012年度後期から初代ルーム学生代表に就任、2014年前期まで務めた。

OSAKA KYOIKU UNIVERSITY'S Topics

本学サッカー部学生が、アルビレックス新潟シンガポールに入団決定

本学サッカー部所属の田中脩史（たなかなおふみ）さん（教養学科スポーツ専攻4回生）が、アルビレックス新潟シンガポールに入団することが決定しました。

アルビレックス新潟シンガポールは、日本とシンガポールの架け橋をスローガンに、Jリーグに加盟するアルビレックス新潟の下部組織として2004年に発足しました。シンガポールのプロサッカーリーグ『S league』に所属しており、世界で唯一、海外に拠点を置く日本人サッカークラブです。

念願のプロ入りに田中さんは、「プロサッカー選手になれたのは両親、スタッフ、チームメイトなど、自分に関わってくれたすべての人のおかげで、期待に応えられるように努力します。また、ここまで成長させてもらった大阪教育大学と広島皆実高等学校の名を広められるように、プレーで恩返ししたいです」と喜びを語りました。ポジションはDFで、「持ち味であるクロスやボール奪取を全面に出してリーグ優勝に貢献したい」と新天地でのプレーに思いをはせています。

小学生向けイングリッシュキャンプを開催

遊びを通して生きた英語を学ぶことを目的に、小学3、4年生を対象としたイングリッシュ・デイキャンプを、2月20日（土）に柏原キャンパス大学会館で開催し、約70人の児童が英語の世界を体感しました。

外国語学習支援ルームのジョン・トムセック特任准教授による進行のもと、子どもたちは互いに英語で挨拶してネームカードを獲得したり、世界の国旗でかるた取りをしたりと、さまざまなアトラクションに挑戦し、ホールは一日中笑い声に包まれていました。

参加した子どもたちは満足気に「（今日の感想を英語で言うと？）Great!」「皆と仲良くなれて楽しかった」などと声を弾ませながら、口々に感想を寄せていました。

なお、このイベントは、北海道教育大、愛知教育大、東京学芸大、大阪教育大による連携事業の一環として、地元柏原市教育委員会の協力を得て開催され、4大学から集まった学生24人が活動をサポートしました。

学生たちからは、「企画や準備は大変だったが、たくさんの子どもたちの笑顔に出会えてしんどさも吹っ飛んだ」などの声が上がり、皆充実した表情を浮かべていました。

聴覚障害支援学生事例コンテストで最優秀賞

本学の障がい学生修学支援ルームの学生らが、「聴覚障害学生支援に関する実践事例コンテスト2015」（2015年12月19日、福岡県春日市で開催）において最優秀賞である「PEPNet-Japan賞」を受賞し、1月13日（水）に栗林学長を表敬訪問しました。

同コンテストは、日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク（PEPNet-Japan）と筑波技術大学の主催で、全国の大学等で障がい学生支援活動を行う支援学生らが、聴覚障がい学生への支援体制の充実を目的とした積極的な取り組みを発表するものです。今回は17大学・団体がポスター発表及びプレゼンテーションを行い、参加者ら約400人による投票で受賞団体が決定されました。

今回の発表で本学は、仲間と手を取り合って励まし合い、同じ目標に向かって進むという意味の「共走」をスローガンに掲げ、支援活動をやってみたい学生が集まり、支え合いながら切磋琢磨してスキルアップし、積み上げてきた技術を先輩から後輩につないでいく循環サイクルになっていることを、ポスターやタブレット端末などで説明しました。特にタブレット端末による動画付きのプレゼンテーションは多くの参加者から好評でした。

同コンテストに出席した支援学生は、「今後はこの活動を多くの人に認知してもらい、学内でもさらに多くの人に参加してもらうことで、より良い支援をめざしていきたい」と述べました。

柏原市手土産コンテストで本学学生が最優秀賞に輝く

手土産を通して同市の魅力を全国にPRする「柏原市手土産コンテスト（アイデア部門）」の最終審査が1月24日（日）に市民文化会館で行われ、本学国語教育専攻3回生の小野田彩花さんが考案した「柏原ハイカラまんじゅう」が最優秀賞に輝きました。集まった30品のレシピのうち選考を通過した5品から、中野隆司市長ら11人の特別審査員と、会場に集まった約120人の一般審査員が実食審査し、ホテルで腕を磨いたフレンチシェフや、調理師免許取得をめざす主婦など、並み居るライバルを抑えて選ばれました。

同作品は、まんじゅう生地の中に、白あんとクリームチーズ、そして同市の特産品であるブドウを活かしてレーズンを練りこみ、しっとりした食感に仕上がっています。今後は商品化に向けて、市内食品企業を中心に交渉が進められる予定です。

小野田さんは、「まさか選ばれると思わず驚きましたが、いつか店頭に並んで、食べた人の喜びにつながればうれしいです」と笑顔を見せていました。

附属学校園ウォッチ

産学共同による英語教育とICT授業の実証を 附属池田小で開始

本学は、株式会社東芝および株式会社増進堂・受験研究社と、産学共同でICTを活用した英語教育及びクラウド活用に関する実証事業「楽しさひろがる英語学習」×「学びつながるクラウド環境」を附属池田小学校にて実施することを2月17日に発表しました。

小学校で2020年度より予定されている英語の教科化とICT授業の導入に向けて、本学が事業の統括と教材開発の指導助言、附属池田小学校が教育実践・検証、東芝がタブレット端末や教育ソリューションの提供、受験研究社が教材コンテンツの開発・提供をそれぞれ行います。

英語教育では、「楽しさひろがる英語学習」として、東芝のもつ音声認識や文字認識技術を活用し、耳で聞いた英語を絵や文字で視覚化したり、自らの発音を録音し振り返ることによって、自らの成長を実感しながら楽しく学ぶ環境を構築します。

記者会見の様子（左から佐々木靖大阪教育大学附属池田小学校校長、吉田晴世大阪教育大学教授、諫山浩司東芝マーケティング戦略室参事、岡本泰治増進堂・受験研究社常務）

タブレット端末を使って英語学習する児童

また、ICT授業では「学びつながるクラウド環境」として、東芝が提供する手書き入力可能なタブレット端末を使って、クラウド型の教育支援システムを導入します。学校だけでなく家庭でもタブレット端末で学習し、クラウド上に保存された学習履歴から学習効果を測定・分析し、個別適応型のデジタル教材を開発します。

発表会では、タブレット端末を使い、英語の音と文字のつながりを認知させる「フォニックス」という学習法を取り入れた英語の授業と、クラウド環境にある問題を解いてデータを蓄積したり、生徒一人ひとりが感想を入力し共有したりするシステムを用いた算数の授業を公開しました。

附属池田小学校の佐々木靖校長は、「これまでは教師個人の力量に頼ってきた部分が大きいが、英語の教科化に向けて教師の力を補ったり、ICTを使って授業と連動させた家庭学習が可能となる。4者で協力して、良い成果を発信していきたい」と意気込みを述べました。

朝日新聞社主催の自由研究コンクールで 附属天小の善明 宗一郎さんが 文部科学大臣賞を受賞

第34回「海とさかな」自由研究・作品コンクール（朝日新聞社、朝日学生新聞社主催）で、附属天王寺小学校4年生の善明宗一郎（ぜんみょう そういちろう）さんが、文部科学大臣賞を受賞しました。受賞作は、自由研究「ぼくのナキオカヤドカリ2015」で、過去2年も朝日学生新聞社賞に輝いており、3年連続での入賞となりました。「景品にディズニーランドの招待券があるので、家族で遊ぶのが今から楽しみ」と嬉しそうに語ります。

善明さんとナキオカヤドカリとの出会いは、夏祭りの屋台。ちょこまかと動く姿に一目ぼれし、「やどちゃん」と名付けて、砂浜と海水による人工海岸を水槽に作り、その日から観察日記をつけ始めました。

昨年度までは生態観察が主体でしたが、今年度は研究を一歩先へ進めました。「これまでの観察から、海水を蓄えて身体をふやかす、砂浜に潜っては出てくるを繰り返すなどの生理現象が起こると脱皮が近いことがわかった。ただ、砂に潜って脱皮する最中に、仲間の爪が当たって死んでしまう事態が頻発したので、どうにかして守りたかった」と当時の心境を振り返ります。そこで、脱皮が近いヤドカリを砂浜とともに市販のスケルトンケースに入れ、ネットを張ることで仲間の侵入を防ぎ、安全な脱皮に成功しました。

「よく食べる子もいれば、人見知りな子もいて、人間と同じくそれぞれに個性があってかわいい。安全な脱皮方法を考え出したのも、それが原因でやどちゃんが死んでしまい、胸が痛んだから」と考案の動機を語ります。

今後の意気込みを聞くと「ナキオカヤドカリは産卵時の生態に謎が多いので、産卵に成功して解明したい。疑問から新しい発見が生まれるのが楽しいので、将来は研究者になりたい」と心を躍らせていました。

教育新時代を生き抜くために

ICT教育支援ルーム 活用のススメ

ICTスキルの習得と新たな授業モデルの創造のサポート施設として

情報処理センター
尾崎 拓郎 助教

情報通信技術を活用した教育、いわゆるICT（Information and Communication Technology）教育は、タブレット型情報端末「iPad」の登場と、その教育活用により飛躍的に進化し、タブレット端末や電子黒板を使ったデジタル授業は、いまや全国の学校で導入されています。映像や音声の駆使、指を使ったタッチパネルの操作など、五感を刺激し、脳内でイメージしやすい学習ツール、そしてこれらのツールから、子どもたちが仲間たちともに自ら答えを見つけ出す学習スタイルは、授業の質的転換をもたらしました。そして、現場の教員も教育新時代に対応するため、ICTのスキルを身につけ、子どもたちをサポートして正しいゴールへと導くコーディネーターという、新たな役割を求められています。

教員養成系大学である本学では、将来その役割を担う学生はもちろん、大学教員も、その実践モデルを示す必要があると考え、2014年10月にICT教育支援ルーム（以下、ICTルーム）を立ち上げました。

本ページでICTルームによる、教員と学生がICTスキルを習得するためのサポートと、新たなデジタル授業モデルの提案のための取り組みの一部を紹介しましょう。

1 タブレット端末を活用した授業づくりのサポート

ICTルームには、100台規模のiPadが常備されており、講義で1人1台利用可能な環境が整っています。機器の貸し出しや操作説明だけでなく、教員それぞれの授業にどう活用できるかといったコンサルタント業務も請け負います。

利用教員の声 Voice

社会科教育講座
山田 周二 准教授

「小学校専門科目社会」の地理分野で、3D地図ソフトウェア「Google Earth」を活用しています。Google Earthは、世界中の衛星画像・空中写真や地理統計データが閲覧できるデジタル地球儀です。講義では、地図や空中写真から何が読み取れるかを問いかけ、学生自らが答えを探し出す取り組みを展開しています。たとえば、市町村におけるみかんの生産量を示した地図から、何が読み取れるでしょうか？ 生産量の多い地域は、日本の南部に分布していることがはっきりとわかりますね。また、気温、年間降水量、ほかの果物の生産量などと比較することで、立地条件を考えることもできます。地図帳だけでは把握できない、でも補助資料を入れると膨大になるこれらの情報が、タブレット一つに収まり、立体的で色鮮やかな姿となって現れるので、小学校で子どもが楽しく学ぶためのアプローチとして効果的ではないかと考えます。学生からも好評で、今年度タブレットを使った講義は、地理分野7コマのうちの1コマのみでしたが、来年度は3から4コマ程度に増やす予定です。

タブレット学習の様子

Google Earthによるみかん生産量の3D表示

2 ICTスキルを高める研修会の実施

学生と教職員に向けたICT研修会を不定期で実施しており、学生スタッフも講師として活躍しています。

参加学生の声 Voice

大学院英語教育専攻2回生
大浦 詩織 さん

勤務先の中学校に電子黒板が導入されたので、使い方を覚えて活用したいと思い、「デジタル黒板研修会」に参加しました。機器の名称や接続方法の操作手順をわかりやすく解説してもらったほか、実践演習では、電子黒板に投影した自作のパワーポイント資料の発表も行いました。つなぐパソコンのメーカー等によって接続端子の種類も違うので不安でしたが、勤務先にある電子黒板に対応できる接続方法を教えてもらい、不安を解消して授業に臨むことができました。次回は、子どもたちの目を引く効果的な見せ方ができる資料の作り方など、さらに発展した企画を期待しています。

デジタル黒板研修会の様子

学生スタッフの声 Voice

大学院数学教育専攻2回生
岡田 祐輔 さん

昨年12月に開催された、学生スタッフ企画の「Word勉強会」で講師を務め、美しく読みやすいレポートや卒論をいかに早く作成するかをテーマに、即座に役立つWord機能を厳選して解説しました。WordやExcelなどのオフィスソフトについて勉強し、人にレクチャーすることで、自分自身も学びが深まりますし、教える技術とICTの知識、学校現場で必要な両方のスキルが身についています。

Word勉強会の様子

3 スタッフによるケースに応じたきめ細かい支援

ITに関する知識や経験が豊富なスタッフが、最新鋭の機器を駆使し、ケースに応じて丁寧にサポートしています。

利用学生の声 Voice

理科教育専攻4回生
香川 和志 さん

ハチの生態をすごろくにした自作教材をつくっています。コマを進めるとハチの幼虫が成虫になる遊び要素を入れるために、3Dプリンターを使って、ハチの巣やさなぎなどの立体模型を製作しました。根気がいるため、手作業では3日ほどかかっていたのが、モデリングから出力まで半日で、頭の中で描いた設計図どおりの出来栄えに仕上がりました。

3Dプリンターで作成したハチの巣の立体模型

利用学生の声 Voice

理科教育専攻4回生
大久保 千弘 さん

卒業論文でカイミジンコの生態について発表する際に、文献に載っていた断面図の構造をよりわかりやすく示せるように、ICTルームの職員の方々の力を借りて、断面図を立体化しました。実物と限りなく近いフォルムに再現でき、ゼミ生からも好評でした！

文献の中のカイミジンコも立体模型に

学生スタッフの声 Voice

文化研究専攻3回生
吉原 寿樹 さん

デジタルでの音楽制作が得意で、課題曲の楽譜を起こしたいとの音楽教育専攻の学生の依頼を受け、音楽ソフトを使って編集中です。キーボードの形をしていますが、ドラムやバイオリンなどいろいろな楽器に対応しているので、オーケストラ仕様にもできますよ。ICTルームには最先端の機器がたくさんそろっていて、学生も利用できるので、一度ふれてみてはいかがですか？

専用ソフトを使って音楽データも作れます

理想の授業・教材を形にするために

ICTルームには、このほか、動画編集用PCや催事中継用大型ビデオカメラなど、個人では手の届きにくい機器・設備が充実しています。しかしこれらはあくまでツールに過ぎず、大事なことはそれを使って何を生み出すか、なのです。〝こんな授業ができたらいいな〟〝こんな教材をつくりたい〟など、それぞれが思い描く理想を、専門のスタッフが形にするお手伝いをします。ICTに関する問い合わせであれば、どんなことでも相談に応じますので、ぜひ気軽にお越しください。

ICT教育支援ルーム

開室時間 平日9:00～17:00（水曜13:00～14:00は閉室）
※他場所への支援でスタッフが一時的に不在となる場合があります
TEL 072-978-3849（内線:3849）
※不在時お急ぎの場合は、内線:4041（情報処理センター管理室、外線不可）まで
場所 柏原キャンパス共通講義棟（A棟）3階 A-312

公式キャラクター「やまお」「たまごどり」

わくわくアルバム大公開

“わたしたちの大学にも魅力的なキャラクターがほしい”
そんな学生たちの願いが集い、学生たち自らの手によって、
公式キャラクター「やまお」と「たまごどり」は誕生しました。
ふたりはさまざまなイベントで、出会った人たちとふれあいを
深めてきました。いまでは大阪教育大学の顔として愛されて
いる、そんなふたりのアルバム帳をこっそりお見せします。

新入生のみんな、こんにちは

入学式のステージでは、初めて見るキャラクターにみんなびっくり！
未知なる生き物を見る視線にふたりもどっきどき！

大盛況のオープンキャンパス

夏真っ盛りのオープンキャンパスでも、ふたりは涼しい顔で初々しい高校生のおともだちとパシャリ。ふたりのうちわももらえるよ。春には大教生として会いたいな！

オープンキャンパスと同時期に開催された、
中学生向けサマーセミナーでは、
ふたりの粘土細工がつくられました。

ゆるキャラたちと共演！

柏原市主催の子育て応援イベント「親子ではっぴーフェスティバル」では柏原市公認キャラクター「かしぴょん」、大阪府民共済キャラクター「にっこりくん」「にこりちゃん」とともにステージに登場！ たくさんのファミリーとも仲良しになりました。

しがみついて離れない！

大学祭でフィーバー！

2013年秋の大学祭「神霜祭」で鮮烈デビューを果たして以来、春の「五月祭」とともに大学祭には必ず参加！ 五月祭では大人気ダンスサークル「いちゃりばちょーでエイサー隊」「YOSAKOIソーランサークル凜憧」「モダンダンス部」との夢のコラボレーションも実現。でも、屋台の美味しい匂いにお仕事を忘れてしまいそう…。

LINEスタンプ発売！

学生たちが企画・デザインした「LINEスタンプ」が120円（50コイン）で発売中！
かわいいポーズや大学生活で使えるメッセージなど全40種のイラストで楽しくコミュニケーションしよう！

スタンプショップで検索するか、
QRコードを読み取ってアクセス！

たまごどり

附属学校にも出張

附属平野五校園連合会30周年記念事業参加のため、軽トラではるばる出張！ ふたりのあとに子どもたちがぞろぞろとついてきてまるで大名行列。

気分はアイドル!?

例年7万人が来場する柏原市の一大イベント、「柏原市民フェスティバル」。柏原市民のみんなにもすっかりおなじみとなったふたりは、360°子どもたちに囲まれ触られ、とげぬき地蔵のよう。このモテモテ状態はまるでアイドル！？

大きな顔が
見えなくなるほどの大人気。

市民ランナーをお出迎え

毎年柏原キャンパスで開催される「柏原シティキャンパスマラソン」。ゴールめざして疾走するランナーを沿道でお出迎えしました。来年こそ一緒に走りたいなあ…。

今年の参加賞は
かわいい手袋！

サクラ咲く!

緊張感漂う合格発表の現場では、掲示板のそばに陣取って合格した受験生たちを祝福☆ アメフト部がお祝いの胴上げ！ サクラ咲いたみんな、キャラクターサポート活動に参加しない？

合格おめでとう！

卒業生のみんな、また逢う日まで

音楽コースオーケストラの演奏に合わせて、拍手喝采のステージへ！
新しい世界へと巣立つ仲間たちを送り出しました。

ひっそりと
出番を待つふたり

おまけ

雨の日も、夏の日も、汗を流して頑張るキャラクターサポーターのみんな、いつもありがとう！！

公式キャラクター誕生秘話

2012年度学生チャレンジプロジェクト『大教キャラクター策定プロジェクト』からこのキャラクターたちが誕生しました。プロジェクトでは、全学に呼びかけて作品を公募し、メンバーによる審議を重ねて2体にまで絞り込み、2012年11月の神霜祭およびウェブサイトで投票を行いました。結果は「やまお」の勝利でしたが、大学は「たまごどり」も個性豊かで甲乙つけがたいと判断し、2体とも公式キャラクターとして採用することとしました。

やまお

柏原キャンパスのある自然豊かな山々をイメージしています。のんびりした性格。ずっと昔からこの地にいて、とても物知りです。柏原キャンパスができてからは学生のみんなを優しく見守っています。

たまごどり

大阪教育大学のロゴマークのフォルムでもある「たまご」がモチーフです。明るく元気で少しおっちょこちょい。今はまだ飛べませんが、未来に羽ばたく学生たちのように、いつか自由に飛びまわることを夢見ています。

池田分校講堂の照明

柏原キャンパスに移転統合される以前の池田分校の本館校舎は、池田師範学校時代の昭和14（1939）年に完成して以来、平成4（1992）年3月の閉校まで、数多くの学生を育て、社会へ送り出しました。さまざまな大学行事などが行われた本館内の講堂の天井にかかっていたこの照明は、最後の行事となる池田分校閉校式も見守りました。附属図書館地下スペースの常設展示コーナー「大阪教育大学の歴史」には、取り壊しの直前に撮影された講堂の写真パネルが展示されています。

［天遊 特別号（Vol.37）］ 2016年3月発行
企画・編集・発行／国立大学法人大阪教育大学広報室
〒582-8582 大阪府柏原市旭ヶ丘4-698-1　TEL.072-978-3344　FAX.072-978-3225　E-mail kouhou@bur.osaka-kyoiku.ac.jp　URL http://osaka-kyoiku.ac.jp
表紙イラスト／岩本 真理子（教員養成課程美術・書道教育専攻）